

登米小学校校歌 （ 昭和9年 作詞：土井晩翠 作曲：山本正夫 ）

1 登米小学校は、明治6年6月18日に誕生しました。
今日は、登米小学校の校歌について、お話します。



2 校歌の歌を作った人は、「土井晩翠」という人です。本当の名前は「つちいばんすい」と言うのですが、みんなが「どいばんすい」と言っているので昭和9年、ちょうど登米小学校の校歌を作った年に「どいばんすい」と読み方を変えました。

「荒城の月」などの有名な歌をたくさん作っている人ですが、仙台生まれで昔の東北大学の英語の先生でした。日本全国の小学校・中学校・高等学校の校歌をたくさん作っています。登米市内では、北方小学校・浅水小学校・錦織小学校・南方小学校・上沼小学校の校歌を「土井晩翠」が作っています。

3 曲を作った人は「山本正夫」と言います。

兵庫県生まれで、東京音楽学校で西洋音楽を学んだ方です。日本で初めてオペラを上演した人です。様々な大学で音楽を教えた後、音楽を教えるために、自分で「帝都学園高等女学校」を作りました。その頃、全国の校歌の作曲をしていました。



この間、校長先生は、山本正夫さんのお孫さんの山本晴美さんと電話で話しました。帝都幼稚園の園長先生をなさっていました。「私は、おじいさんが亡くなってから生まれました。全国のいろいろな学校から、おじいさんが校歌を作曲してくださいました。」と聞くとうれしくて、おじいさんという人に会いたかったなあと話されていました。

4 では、校歌の歌詞についてお話ししましょう。すごく難しい歌を、皆さんはよく歌えています。

「三百余年古の」で始まります。330～40年位前の昔々という出だしです。この校歌ができたのは、昭和9年（1934年）ですから、そのときから300年以上前ということです。今年から数えると400年以上前の話です。

登米に「伊達宗直」という殿様が、水沢から家来を連れてやってきました。それは、伊達政宗の命令で、「登米に行って、城を建て、町を作って、登米を治めなさい。」と言われたからです。この写真は、登米小学校の後ろの山にある「天山公」のお墓に納められている「宗直公」です。



5 「郷土の歴史 物語る」ですが、郷土とは、ふるさと登米のことですね。そして、ふる

さと登米には、長い長い歴史があり、物語がありますよ。」という意味です。

6 戦の後の「戦い」とは、400年以上昔、登米郡辺りを治めていた、「葛西」氏が「豊臣秀吉」の命令を聞かなかったということで、仕置き軍の「木村」氏から攻められて滅んだ戦の事です。でも、生き残った侍たちが集まって「葛西・大崎一揆」というものをまた起こしました。ますます怒った豊臣秀吉は、今度は伊達政宗にお仕置きを命じました。

7 当時は、よろい・かぶとを身につけて戦をしました。佐沼鹿ヶ城の戦いでは、伊達正宗軍に捕まった侍500人、領民2,000人が全員殺されたという話が残っています。「くびだん」という地名もあります。あまりにもむごくて、近くの人々が弔いをしています。

伊達宗直は、伊達政宗の家来として、大坂の陣や、様々な戦（いくさ）を一緒に戦いました。

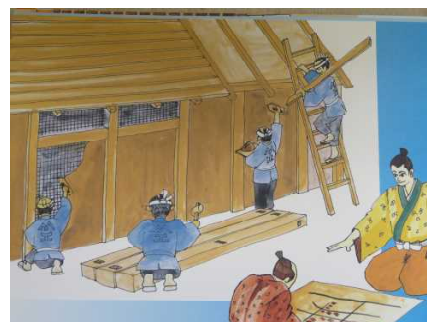
8 ずっと、戦ばかりしていたので、人も殺されたり、逃げたりして、田畑を耕す人がいなくなりました。家も壊されたり燃やされたりして、登米のあたりは荒れ果ててしまいました。

9 「跡を開きししわが祖先」とは、伊達政宗の命令で、荒れ果てた土地に伊達宗直とそのけらい衆が移り住んで、家を建て、田畑を耕して米を作り野菜を作って、豊かに暮らせるようにしたのですよという意味です。

宗直が登米に入ったのは1604年です。

10 田畑だけでなく、人が住めるように、家を建て、町を作りました。実は、宗直が登米に来たときは、殿様のお城はボロボロでとても住める状態ではなく、残っていた農家を借りて住みながら、寺池城を建て、できてからやっと、お殿様はお城に移ることができたのです。

人も足りなかったので、「葛西」時代からの家来や領民も伊達の領民として扱ったので、みんなで力を合わせて、登米の町作りに励みました。



1 1 2 番の歌詞です。

「その恩澤を受け継げる」とありますが、ご先祖様が苦勞して、田畑を耕し、登米に人が暮らし住めるようになったご恩を受け継いでいるのです。という意味です。

この写真は、300年くらい前の登米の地図ですが、「御城」とあるのが寺池城のあったところです。今は城址公園・裁判所が建っています。登米小学校の場所は、昔はお侍さんが住んでいる屋敷がありました。桜小路や前小路や後小路などの侍屋敷通り、三日町・九日町・上町などの商人・お店の通り、職人町などと、身分などによって場所を決められました。伊達宗直が命令して町割りをしました。



1 2 「登米の町のわが母校」とは、ご先祖様のご苦勞のお陰でできた登米の町に私たちが勉強している学校がありますよ。「母校」とは自分に知識を与え、育ててくれた忘れられない大切な学校という意味です。

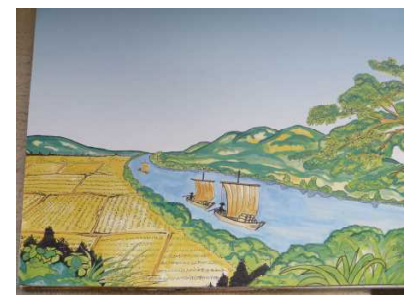
1 3 学校の前を北上川が流れています。この北上川は伊達宗直が命じて作った川です。実は北上川は、昔は佐沼と登米の間を流れていました。毎年のように洪水になって、せっかく育った稲も水につかってだめになったり、田畑がながされ、いつも貧乏な暮らしをしていました。川を今の場所に作り替えてから、洪水は殆どなくなりました。それから毎年のようにたくさんの米が実り、豊かな暮らしができるようになったのです。宗直は、治水（川の作り直し）、開田（荒れ地を田畑にする）で大きな業績を残した殿様です。



1 4 「分水嶺を遠く見る」

分水嶺とは、降った雨水が分かれるところです。こちらの流れは太平洋に、こちらの流れは日本海にというように、水を分ける場所、つまり一番高いところ、山のとっぺんという意味です。

「登米から見える分水嶺」は何処でしょうね。校長先生は、栗駒山だと思うのですが、別の人には、羽沢の高い山のことでないかという人もいます。栗駒山だとすれば、二迫川、三迫川が迫川になって、最後に北上川になって太平洋に注ぎます。秋田や山形の方に流れた川は、雄物川や最上川となって日本海に注ぎます。もし羽沢の山だとすれば、西側は羽沢



川に集まり、北上川となって太平洋に注ぎ、東は水尻川に集まり、志津川湾の太平洋の海に注ぎこまれます。校歌の分水嶺は、どの山を指しているのでしょうかね。

さて、今日は登米小学校の校歌1番と2番についてお話しました。校歌は4番まであります。いつか続きをお話できればいいなと思います。自分で調べ、考えてもいいですね。

登米小学校の校歌は難しいです。それは80年前に作られたこと、当時は登米尋常高等小学校と言って、今の小学1年生から6年生までと、中学生位の高等科の子供たちも同じ学校で勉強していました。きっと土井晩翠さんは、高等科の子供たちをイメージして作ったのかなと思います。中学生が目指すような高度な内容のような気がします。

皆さんは、すごく高い目標に向かう難しい校歌を歌っています。この校歌の内容・目標が理解できるような子供、そしてその目標に向かって生きていく大人に育ててほしいなと校長先生は、願っています。

これで開校記念朝会のお話を終わります。

(平成26年6月17日 朝会での講話)

